

表現する“からだ”を獲得するために必要な要素に関する研究

岡崎女子短期大学 本山 益子

研究目的

保育者を養成する現在の職について18年の間、多くの学生や保育者と関わってきた。ここ数年、出会う学生のからだに「鈍さ」「だらしなさ」を感じるとともに、いくら伝えても「響かない」「伝わらない」もどかしさを感じるようになってきている。さらに、保育者たちが、そのような学生を仕方のないものとして受け入れる空気も感じている。しかし、そのようなからだの保育者に保育される子どもたちは、どのような影響を受けるのだろうか。子どもたちが被害者になることが危惧される。子どもたちにとって人的環境となる保育者のからだは、受信・発信のできる“からだ”であって欲しいと願い、カリキュラムの見直しや授業内容・方法の検討を行うとともに、同じ思いをもつ様々な仲間との討議も試みてきた。

そして、このような現状を改善する手がかりとして、今回は、保育者として身につけておくべき基礎技能科目のひとつとして新設された、本学独自の“パフォーマンス・ボディ”という授業を対象とした。そして、学生の授業感想や授業後の評価などから、学生は身体表現に関してどのような力を獲得しているのか。それらの力を獲得していく過程にはどのような要素が存在しているのかについて検討するための基礎資料を得ることを本研究の目的とした。

研究方法

1. 対象：本学幼児教育学科1年Bクラス47名
2. 期間：2002年10月～2003年3月
3. 分析方法：
 - ①KJ法による毎時間の授業感想の分析
 - ②10段階による授業評価(5の結果参照)

結果と考察

1. 初回の授業結果

自分を変革したいという意欲・願望・期待を示した者(26人・55%)。楽しい授業を望んでいる者(11人・23%)。表現について否定的にとらえた記述(嫌い・苦手・恥ずかしい・難しいなど)が述べ29件(22人・47%)。しかし、表現に対して新たな認識をもった者(10人・21%)や、魅力を発見した者(11人・23%)もみられた。つまり、表現に対してもっている否定的な印象を認める一方、その認識を改め、表現の魅力に気づき、授業に「自分の変容」を望むなど、少なからず授業への動機づけができたことが読み取れる。身体表現につい

ての講義やビデオが学生に届いた結果と考える。

2. 楽しさを示す記述(2～13回の授業)

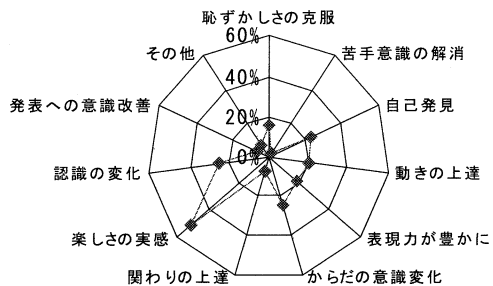
「創り・表現すること」「動くこと」「発表したり、見ること」「友達と関わること」などの楽しさを示す記述は、実技1回目の「いろいろな送る・受ける(41人・87.2%)」と2回目の「大・小(38人・80.9%)」などの初期において非常に多い。それに対し、自分たちの発表をビデオで見た13回目の授業(3人・6.7%)では著しく少なくなった。ビデオに映る実際の自分と、イメージしていた自分との差により落胆している様子が窺えた。

3. 自己変容を示す記述(2～13回の授業)

自己変容を示す記述は10回目の授業「関わり遊び(9人・20.9%)」において最も多くみられた。2回目の授業で実施した「共振」を再体験で具体的な比較が可能となり、「以前より動けるようになった」と実感することができたものと考えられる。

4. 最終回の授業感想

半期14回の授業を振り返った記述から「楽しさ」と、「自己変容」を示す記述の中身を分類し、その出現率を示したものが下図である。



5. 授業評価の結果(平均得点)

自分のからだを意識する(7.33)精一杯からだを使って動く(7.65)動きをいろいろに変化させる(7.37)人と違う動きをする(6.83)なりきって動く(7.31)リズムカルに動く(6.8)いろいろなものに対して探究心や関心をもつ(7.21)からだを通して人や物を感じる(7.48)動きやからだで表現する(7.48)自分の意見も言いながら友達と協力する(7.58)人前で動いたり発表する(6.79)いろいろなもののイメージを浮かべたり膨らませる(7.65)人と違う発想をする(6.81)子どもの表現を見る(7.16)子どもの表現を援助する(6.71)

まとめ

今回の結果は、身体表現に関するいろいろな力を、14回の授業の中で一定程度獲得できたと認識した学生が多いことを示している。そして、このような認識は、上図に示された身体表現の「楽しさ」や、「自己変容」の実感によってもたらされたのではないかと推察するにいたった。